

平成30年6月28日現在

機関番号：32629

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26284043

研究課題名(和文) マニフェスト・デスティニーの情動的効果と21世紀惑星の想像力

研究課題名(英文) Manifest Destiny and Planetary Imagination of 21st century

研究代表者

下河辺 美知子 (Shimokobe, Michiko)

成蹊大学・文学部・教授

研究者番号：20171001

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は19世紀アメリカの拡張運動を牽引したマニフェスト・デスティニーの文化的・政治的意味を検証し、その心理的・精神的効果が情動を操作するナラティブとしていかに機能してきたかを小説、政治言説、大衆文化、映像などを使って分析した。その結果、アメリカ国家の拡張運動を地球規模の中で見るための道筋を得ることができた。19世紀アメリカの政治的無意識への新たな理解は、球体として地球を見直す視点につながり、本研究が21世紀の世界情勢分析に有効であるという見通しを得た。2018年3月に最終シンポジウムを行い、それをもとに、21世紀世界における惑星の共存への提言として2019年3月に成果物出版の予定である。

研究成果の概要(英文)：We have examined the cultural/political implications of Manifest Destiny, a concept that became the driving force behind expansionist nationalism in mid-nineteenth-century America. Moreover, an in-depth analysis has clarified the ways in which the concept served as an affective narrative controlling its psychological impact in the fields of fiction, political discourse, and popular culture. As a result, our research has uncovered new clues for re-interpreting US expansionism in a global context. Our renewed understanding of the political unconscious of Victorian America has led us to a unique perspective in which we look at the earth as a globe, proving that our approaches will contribute to the analysis of contemporary global situations. In March 2018 we held a symposium where we finally redefined the concept of planetary symbiosis in the twenty-first century, and we are planning to publish a related collection of articles in March 2019.

研究分野：アメリカ研究 精神分析批評

キーワード：マニフェスト・デスティニー 惑星思考 環大西洋 環太平洋 情動

1. 研究開始当初の背景

2014年に本研究を開始したときは、19世紀アメリカの領土拡張主義スローガンであるマニフェスト・デスティニー (Manifest Destiny) を再検討し、その情動的効果に注目することにより見えてくものがあることを期待した。マニフェスト・デスティニーのレトリックが、歴史をとおしてアメリカの空間的・時間的位相を作り出してきた経緯を追っていけば、アメリカが牽引している21世紀グローバルゼーション世界の様相を浮き上がらせることができるのではないかと予想があったからである。そうした議論のためには、アメリカと非アメリカの境界の規定法を供給するレトリックの一つとしてマニフェスト・デスティニーをとらえることが有効であるという確信から本研究を開始することになった。

テロや核という問題に地球規模での対処を迫られている21世紀の現在、国際関係への新たな提言を求め、学際的な結論を導き出すことを予想し、人文研究が果たすことのできる責務の一端を果たすことができればと希望して研究をプロジェクト開始した。

2. 研究の目的

本研究では、アメリカ合衆国の空間を囲い込もうとする内包的動機と並行して、西半球の主体としての「アメリカ」が地球規模に拡大しようとする外的拡張のダイナミズムの両方を追っていく。19世紀、20世紀、21世紀と連なるアメリカの社会的・政治的文脈のなかで、その時代の要請によってアメリカが自己と他者を定義してきた過程を検証するのが目的であった。この議論においては、アメリカ的自己決定・自己拡張のレトリックとして機能してきたのがマニフェスト・デスティニーである限りアメリカがグローバルゼーションにおいて果たした役割はマニフェスト・デスティニーという概念を抜きに語れないとの見通しがあった。

マニフェスト・デスティニーがアメリカの歴史的展開の局面において常にアメリカを牽引する力を発揮してきたことを検証し、そのレトリックの国際政治における意義を歴史的にたどると同時に、その心理的・精神的効果がアメリカ国民の情動を操作するナラティブとしていかに機能してきているかに焦点をあてるのが本研究の特徴である。その際、「半球思考」「惑星思考」という近年の批評動向をふまえ、アメリカ研究という地域研究の枠を大陸間的視野に広げ、環大西洋的・環太平洋的の両面から南北アメリカ大陸の歴史的意義を探ろうと計画して本研究を開始させた。

具体的な研究目的としては、大きくわけて以下のように二点があった。

第一は、マニフェスト・デスティニーが国民の感情に直接訴える効果を発揮するものであったとの前提から、情動という概念を本

研究の一つの柱として設定し、その政治的効果を検証していくことにした。モンロー・ドクトリンが政治文書として知的な読み替えによってその行為遂行的効果を発揮したのに比べ、20年後に文藝雑誌で唱えられたマニフェスト・デスティニーは、愛国心であれ、男性的欲望であれ、共同体的共感であれ、信仰心による神への問いかけであれ、他者の心に反応を引き起こすという意味できわめて affective (情動的) な概念であると予測されたからである。

第二には、2009年～2013年に行った基盤 (B)「モンロー・ドクトリンの行為遂行的効果と21世紀グローバル・コミュニティの未来」で環大西洋的視座からアメリカの内包運動について研究したが、その成果をふまえ、本研究では南北アメリカ大陸の西側へも研究対象をひろげ、環太平洋的規模におけるマニフェスト・デスティニーの効果を研究対象とした。アメリカの空間に囲いこもうとする運動がモンロー・ドクトリンの効果によって推進されてきたとすれば、排除しつつも包含すべき他者への空間に対する呼びかけのレトリックとして、マニフェスト・デスティニーの情動的効果を検証しようと考えていた。

以上二つの目的を達成するために梃子として使用したのが、マニフェスト・デスティニーであるが、ことにその情動的効果の政治的意味を研究の中心に置くことにした。その際、レトリック分析に加え、精神分析的アプローチ、人種の言説への洞察、演劇・芸能・音楽についての研究などを取り入れて、政治・文化の総体として地球規模の空間における「アメリカ」の意義と効果とについて学際的な考察を提示することを目指して本研究を開始した。

3. 研究の方法

本申請は、アメリカ研究・文化研究という領域は共有するものの、個別の研究対象と独自の研究手法で仕事をしている四名が行う共同研究である。それゆえ個人ベースでの研究を活発に行っていく一方、研究会や講演会・シンポジウムの開催を通じて、研究成果の知見のすり合わせの機会を頻繁にもってきた。各人が専門とする分野において研究を深化させていき、その成果を持ち寄ることで共通の思考の枠組みを生み出すことが、複雑化し混迷の度を深める21世紀の国際関係において人文科学研究のなすべき責務を果たし学際的提言を行うために有効な手段であると信じたからである。

四年間の研究期間の前半は個人ベースの研究に重点を置き、後半は知見のすり合わせ・各人の見解についての批判的検討により多くの時間を割くという方法を設定した。結果的には四人相互の間の討論を、共同でのシンポジウム開催など後半にかけて密に行った。一方、個人ベースの研究も最終年度にいたるまで四年間を通して活発に行われたこ

とは業績リストからも明らかである。

方法としては以下の三点にまとめることができる。

(1) マニフェスト・デスティニーの歴史的検証をするために、情動という概念についての先行研究を概観し、情動が政治・文化を牽引することについての分析を整理する。その上で、マニフェスト・デスティニーのレトリックにおいて情動がどのように稼働し、アメリカ史の各局面においてどのような形で表れているかを研究する。感情として身体に作用する機制として、および他者の感情に入り込み他者の行動を喚起する機能としての情動を、複数の学問領域から立体的に検証する。情動とは他者へと伝達される感情であり、伝達によって他者の心に反応を起こすものであるとすれば、アメリカという主体が空間的に拡張するときに出会う他者にたいしてどのような情動作用が働いたかを、政治文書、定期刊行物、文学テキストを使って分析していく。

(2) 南北アメリカ大陸の環大西洋・環太平洋文化圏における地理的想像力について検証する。この課題では、南北アメリカ大陸を、対ヨーロッパとの関係(環大西洋的連環)および、対オセアニア・アジアとの関係(環太平洋的連環)の二つの空間の中に置き、マニフェスト・デスティニーの持つ情動的機能がどのように働いているかを見ることを目的とする。ことにマスメディアと大衆文化に注目することで、知性の言語でなく、言語に転換される以前の感情に働きかける情動の機能をとらえアメリカ的地勢図の変遷をたどっていく。たとえば、19世紀末の米西戦争におけるジャーナリズム(活字のほか、絵や写真を多用した新聞など)の煽情性などを見ると、メディアという媒体は、視覚・聴覚に働きかけるものであるが故、人々の情動を操作する強力なツールとなっている。そうした前提を共有し、劇場や映画という空間における情動的効果を検証し、マニフェスト・デスティニーの情動的効果が演劇・演芸にどのような変容をもたらしたかを探る予定である。

(3) 21世紀世界における惑星的想像力

20世紀グローバリズムを先導してきたアメリカの位置を地球規模の中で、惑星思考によって見直し、さらに、人文科学としての文学研究が21世紀の世界にどのようなメッセージを送ることができるかを検討する。政治のレトリックであるモンロー・ドクトリンに続き、マニフェスト・デスティニーという情動にからむレトリックがアメリカという主体の内包・拡張運動の燃料として稼働してきた歴史的経緯を検証することにより、グローバリゼーション批判としての言説の可能性を探る。一つの方法としては、これまであまり注目されてこなかったテキスト精読の方法論としての脱構築と惑星思考との相互作用を検討し、21世紀ならではの文学思想史の

構築を目指していく。また、半球思考という枠組みにおいて、南北アメリカ大陸と他の地域との関連性を再検討し、大陸対島という二項対立が文化的・政治的な構築物であることを明らかにする。

以上の目的をめぐって研究を進めるにあたり、大学の壁を越えて研究組織を編成したが、結果的にはこの方法は有効であったと言える。下河辺は共同体の恐怖と不安についての精神分析的洞察、巽は惑星思考とアメリカ文学、舌津はポピュラー音楽と文学テキストの相互侵犯、日比野は1920年代から1950年代の映画・演劇・大衆文化と、それぞれ現在の関心・興味は異なるものの、いずれも19世紀後半から現在にいたる合衆国のアイデンティティ形成において、マニフェスト・デスティニーの情動的効果が重要な役割を果たしているという認識を共有していることが研究を重ねるほどに明らかになっていった。

4. 研究成果

四年間の研究期間を終えた時点で全体的な研究成果としては以下の三点を挙げておきたい。各々の点において実際にはどのような業績として発表されたかについては、その後説明していく。

(1) マニフェスト・デスティニーの歴史的検証と情動という概念がそこにどのように関係しているかという課題については、文化的・政治的意味の歴史的検証の結果、マニフェスト・デスティニーのレトリックが絶大な影響力を発揮し、アメリカ社会・政治・文化において19世紀以降21世紀に至るまで歴史を通して行為遂行的効果を発揮したことが検証された。

(2) 南北アメリカ大陸の環大西洋・環太平洋文化圏における地理的想像力の検討については、本来政治文書として扱われ研究されてきたマニフェスト・デスティニーの言説が20世紀に至っても度々更新されてきたことを踏まえ、本研究では文学研究の手法、精神分析的洞察、大衆文化研究への影響関係などからのアプローチで分析した結果、こうした人文研究ことに文学研究や批評理論の手法が有効であることを確信した。

(3) 21世紀世界における惑星的想像力の批評手段としての有効性についてはガヤトリ・スピヴァクの「惑星思考」やワイチャー・ディモクの「深い時間」を批判的に発展させ、西半球・東半球という概念が喚起したレトリックがいかに19世紀アメリカの政治的無意識を形成したか、20世紀ポストコロニアル研究へいかに有効な視座を与え、球体としての地球を見る視点につながり21世紀の世界情勢分析に貢献するものであるかが証明された。

本プロジェクトのテーマについて以上のような研究成果を得たが、これらの成果は以下の五つの場において発表された。どの場に

おいても、海外の研究者との交流、あるいは海外の学会での発表など国際的な活動が大きなウェイトをしめていることも注記しておきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)以下は4名のメンバーの業績の中から一部を収録したものである。

(1) 研究会

大きく分けて三種類の研究会を行った。各専門領域の研究者を招いた研究発表 アメリカ文学研究者に基調発表をしてもらい、その後一つのテキストについての若い研究者によるワークショップ 国内外の学会、研究会への共催

は4年間で計七回行われた。

- ・2015年1月31日 常山菜穂子(慶應大学)「アメリカ演劇(史)の<明白なる運命>」
- ・2015年6月30日 サミュエル・オッター(U.C.Berkeley)“Form and Formlessness in *Moby-Dick*”
- ・2016年3月6日 貞廣真紀(明治学院大学)「重ね書きのパレスチナと情動：ハーマン・メルヴィル『クラレル』を中心に」
- ・2017年3月10日 石原剛(早稲田大学)「翼の福音、あるいは呪われた凶器「リンドバーグと飛行物語」
- ・2017年7月28日 古井義昭(青山学院大学)「NETWORKED SOLITUDE: JOHN MARR AND OTHER SAILORSにおける孤独の共同体」
- ・2017年9月28日 フランソワ・スペック(リヨン高等師範学校)「ソローと西漸の神話(Thoreau and the Westering Myth)」
- ・2017年12月11日 白川恵子(同志社大学)「北米英領植民地保全のために：奴隷反乱・陰謀との闘い」

は計四回行った。基調発表によりアメリカ文化におけるマニフェスト・デスティニーの諸相が浮き上がったのみならず、与えられた一つのテキストを読むワークショップは若い研究者にとって研究へのよい刺激となったようである。四回の研究会の基調発表者とタイトルは以下の通り。

- ・2018年2月19日 渡邊克昭(大阪大学)「デリーロ文学に置く素粒子：『ポイント・オメガ』から『ゼロK』へ」
- ・2017年2月24日 越智博美(一橋大学)「名もなき者たちの物語：寄せ集めとしてのU.S.A.三部作」
- ・2015年10月26日 佐久間みかよ(和洋女子大学)「エマソン言説の“character”が指示する超越する身体性/大陸性」
- ・2014年12月5日 大串尚代(慶應大学)「女性旅行者と地政学的想像力」

(2) シンポジウム

本研究のテーマをもとに、研究代表者および研究分担者が企画、発表したシンポジウムが行われ大いに成果をあげた。

- ・2017年12月9日 日本アメリカ文学会東京支部シンポジウム『ポカホンタスの400年：環西洋文学史を再考する』司会下河辺、レスポンドント 巽
- ・2018年3月22日「マニフェスト・デスティニーと21世紀アメリカ合衆国の現実」(当プロジェクト最終成果発表のためのシンポジウム)司会・講師 下河辺、講師 巽、舌津、日比野

(3) 雑誌論文

研究代表者、研究分担者の四人の雑誌論文寄稿の成果については以下でリストを挙げてあるが、このリストはスペースの関係から全論文数の一部であることをおことわりしておく。日本語論文に加えて英語論文、国際学会における英語の発表の数も多い。中には海外で発行された雑誌に掲載された論文もあることをことわっておく。

(4) 学会発表

研究代表者、研究分担者の四人の学会発表成果については以下でリストを挙げてあるが、このリストはスペースの関係から全発表数の一部であることをおことわりしておく。海外での研究発表が多いことも注目に値しよう。2015年6月に行われた Tenth International Melville Conference(Keio University, Tokyo)では四名のメンバーのうち三名(下河辺、巽、舌津)が研究発表を行った。また、2017年6月の Eleventh International Melville Conference (Kings College, London)では、下河辺と巽が発表し、海外のメルヴィル研究者と交流をした。19世紀の代表的アメリカ文学作家である Herman Melville は近年、環大西洋の視座に加え、環太平洋の視座から読み直されており、マニフェスト・デスティニーのアメリカ的意義をメルヴィルの作品で追及し、本研究の成果を国際的にしらしめる機会となった。

(5) 著書

研究代表者、研究分担者の四人がかかわった著書のリストは以下にあげた通りである。特筆すべきは、本プロジェクトのメンバーがかかわったアンソロジーが二冊出版されたことである。一つは、成蹊大学アジア太平洋研究センタープロジェクトの成果本『アメリカン・レイバー』(2017年6月)であり、日比野が編集の責任をもち、下河辺、舌津が寄稿している。また、さらに重要な著書としては、『モンロー・ドクトリンの半球分割』(2015年6月)を挙げておく。2014年3月に終了した基盤(B)「モンロー・ドクトリンの行為

遂行的効果と 21 世紀グローバル・コミュニティの未来」の成果本である。編著は研究代表者の下河辺、他の三名の研究分担者が寄稿し、その他 9 名の論文が収録されており、各論者はモンロー・ドクトリンとアメリカ社会とへの洞察が込められたものとなっている。

また、本申請の最終年度 2018 年 3 月 22 日の最終シンポジウムで四人が発表した原稿を中心として『マニフェスト・デスティニーと 21 世紀グローバル化の世界』（仮題）の準備が進められており、2019 年 5 月出版の予定。

本研究の目的は、マニフェスト・デスティニーの政治的、歴史的、文化的意味を解明し、アメリカ国家の歴史をあらたな面から見直すとともに、マニフェスト・デスティニーのレトリックの情動的効果が現在のアメリカをどのように形成し、それがグローバル化にどのような形で表れているかをさぐることであった。学会のみならず、社会への発信効果は即座には確認できるものではないとは言え、各方面からこのプロジェクトに寄せられる反応を聞くにつけ、人文研究が 21 世紀世界へ提言する可能性についてさらなる確信を得たことを付け加えておきたい。

〔雑誌論文〕(計 15 件)

下河辺美知子 “Inland/Oceanic Imagination in Melville’s *Redburn*” *The Japanese Journal of American Studies*. vol 28 June. 2018 (forthcoming)

下河辺美知子 「排除/包括を演じる集会：ジュディス・バトラー『アセンブリ』への応答」『成蹊英語英文学』第 22 号、2018、1-17

下河辺美知子 "The Pacific in the Easter/Western Hemisphere: Latitude and Longitude in Melville's Nautical Discourse." *Seikei Review of English Studies*, no. 21, March 2017. 1-18.

下河辺美知子 『アーサー・ゴードン・ピムの物語』における半球的想像力：緯度と経度とモンロー・ドクトリン」『成蹊英語英文学』第 20 号、2016、1-18

下河辺美知子 下河辺美知子 投票ブースの中で起こったこと：2016 年大統領選挙『現代思想』特集「トランプ以後の世界」vol.45-1 2017、136-43

巽孝之 「ニクソン政権下の脱構築 / ポー、ド・マン、ホフスタッター」 / 『現代思想』2 月号 [43 巻 3 号] / 2015 年 2 月 1 日 / 134-53 頁

巽孝之 「カッサンドラ・コンプレックス—予言の文学と環境批評」 / 『エコクリティシズム・レビュー』8 号 / 2015 年 8 月 / 1-14 頁

巽孝之 「パラノイアの帝国—テイラー、ゴールドウォーター、トランプ」 / 『現代思想』1 月号 (45 巻 1 号) / 2017 年 1 月 / 88-95 頁

巽孝之 『盗まれた廃墟—ポール・ド・マンのアメリカ』 / 彩流社 / 2016 年

巽孝之 “U.S.-Japan Literary Interactions in the Transpacific Cultural History” / *Oxford Research Encyclopedia of Literature* / 2017 / online

舌津智之 「SF ホラーの詩学 T. S. エリオットとスティーヴン・キング」『T. S. Eliot Review』27 号、2016、1-21

舌津智之 「いと(わ)しき女たちの黄昏 / 薄明」『早稲田文学』1015 号、2015、282-23

舌津智之 「欲望と憧れ アメリカ文学にみる蛾と星の詩学」『世界思想』42 号、2015、5-8

舌津智之 「同性 / 同名のエロス 『ピエール』と『ウィリアム・ウィルソン』」『ポー研究』5・6 号、2014、73-82

舌津智之 “Poetry in Motion,” *Leviathan*, vol. 16, no. 1, 2014, 164-67

〔学会発表〕(計 17 件)

下河辺美知子 "Inland /Oceanic Imagination in Melville's *Redburn*: Space in the Political Climate of America in the 1840s." The 11th International Melville Conference, June 30, 2017, Kings College, London.

下河辺美知子 「Silence と Muteness: アメリカという他者によびかける声」『戦争文学のトラウマ』甲南大学プロジェクト 2017 年 8 月 10 日甲南大学ネットワークキャンパス東京

下河辺美知子 "Departure of John Smith in the Pocahontas Narrative." at "Pocahontas and After: Historical Culture and Transatlantic Encounter, 1617-2017." Institute of Historical Research and British Library in London, March 17, 2017.

下河辺美知子 “The Pacific in the Imagination of the Nineteenth-century America : Nautical Discourse of Herman Melville” at Colloquium, “The Transpacific Imagination” Nov. 4, 2015, University of California, Berkeley.

下河辺美知子 “The Pacific in the Western/Eastern Hemisphere : Longitude in Melville’s Nautical Discourse” The 10th International Melville Conference, June 27, 2015, Keio University, Tokyo.

下河辺美知子 ”Vertical-Horizontal Imagination in *The Narrative of Arthur Gordon Pym of Nantucket*” The Fourth International Edgar Allan Poe Conference, February 28, 2015, Manhattan, NY

巽孝之 “Young America in Literature’ Reconsidered” / The 10th International Herman Melville Conference, Moderator: Robert S. Levine / June 26, 2015/Keio University, East Hall G-SEC Laboratory,

Room A

巽孝之 Plenary Talk: “The Barren Land of Figures: The Intellectual Limits and Liminality of Auerbach, de Man and Mizumura” / The 7th Annual LiberLit Conference “For Discussion and Defense of the Role of ‘Literary’ Texts in the English Curriculum” // Plenary Speaker: Takayuki Tatsumi / February 22, 2016 / Tokyo Woman’s Christian University, Room B

巽孝之 「トマス・ジェファソン草稿「独立宣言」成立過程の一考察」 / 日本学術会議 言語・文学委員会 古典文化と言語文科会 (第23期・第5回) / 2016年7月29日(金) 13:00 / 日本学術会議 5-C (1) 会議室

巽孝之 “The Rhetoric of Exodus: Reading Barbara Johnson’s Reading of Freud” / PAMLA (Pacific Ancient and Modern Language Association) 114th Annual Conference / SESSION 1: Psychoanalysis as an American Frontier: What Freud Discovered / Session Chair: Fuhito Endo, Presenters: Todd Dufresne, Keiko Ogata, Takayuki Tatsumi / 11 November 2016 (Friday) 8:40-10:10am / Santa Rosa, The Westin Pasadena, California

巽孝之 「パラノイド文学の国境」 / アメリカ学会第51回年次大会シンポジウム「反エスタブリッシュメントの系譜」(司会: 宇沢美子、討論: 宇野重規、報告: 会田弘継、南修平、巽孝之) / 2017年6月4日(日) 13:15-15:45 / 早稲田大学 早稲田キャンパス 大隈講堂

舌津智之 「『ロリータ』とパティ・ページ」名古屋大学英文学会、2017年7月18日、名古屋大学

舌津智之 「アメリカ文学と歌謡曲」日本アメリカ文学会東北支部4月例会、2016年4月30日、東北大学片平キャンパス

舌津智之 「不寛容な時代の愛: アメリカ文学における抒情の系譜」第60回日本アメリカ文学会関西支部大会フォーラム、2015年12月3日、京都学園大学

舌津智之 「SFホラーの詩学: T・S・エリオットとステイヴン・キング」日本T・S・エリオット協会第28回大会、2015年11月8日、愛知学院大学

舌津智之 “Bartleby and Poetry: Melville’s Narrator as a Failed Poet,” The 10th International Melville Conference, June 25, 2015, Keio University, Tokyo.

日比野啓 “What Americans Learned in *Scarlett* (1970): The Mirroring Effect of Intercultural Collaboration,” 「アジア太平洋地域における情動メディアとしての西洋音楽の影響」2016年度第一回研究会、2016年10月8日、成蹊大学

(図書)(計11件)

下河辺美知子、巽孝之、舌津智之、日比野啓

『モンロー・ドクトリンの半球分割: トランスナショナル時代の地政学』彩流社、2016年

日比野啓、下河辺美知子、舌津智之
『アメリカン・レイバー: 合衆国における労働の文化表象』彩流社、2017年

下河辺美知子 『グローバルイゼーションと惑星の想像力: 恐怖と癒しの修辞学』みすず書房、2015年

巽孝之 『盗まれた廃墟: ポール・ド・マンのアメリカ』彩流社、2016年

巽孝之 (Takayuki Tatsumi) *The Cambridge History of Postmodern Literature*. Cambridge UP, 2016.

巽孝之 (Takayuki Tatsumi) *Dis-Orienting Planets: Racial Representations of Asia in Science Fiction*. UP of Mississippi, 2017.

巽孝之 『エコクリティシズムの波を超えて: 人新世の地球を生きる』音羽書房鶴見書店、2017年

舌津智之 『身体と情動: アフェクトで読むアメリカン・ルネサンス』彩流社、2016年

舌津智之 『現代アメリカ: 日米比較のなかで読む』新曜社、2014年

日比野啓 『文化現象としての恋愛とイデオロギー』風間書房、2017年

日比野啓 『ステージ・ショウの時代』森話社、2015年

〔その他〕

<http://md2.shimokobe.net/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

下河辺美知子 (SHIMOKOBE, Michiko)

成蹊大学・文学部・教授

研究者番号: 20171001

(2) 研究分担者

巽孝之 (TATSUMI, Takayuki)

慶應義塾大学・文学部・教授

研究者番号: 30155098

舌津智之 (ZETTTSU, Tomoyuki)

立教大学・文学部・教授

研究者番号: 40262216

日比野啓 (HIBINO, Kei)

成蹊大学・文学部・教授

研究者番号: 40302830